

Gillette ブルゴーニュ — 第1幕

ブルゴーニュ — フランス
第1幕 — 第二の人生の農家

物語は決して同じにならない。物語が出会う瞬間が、決して同じではないからだ。場所は変わる。季節は変わる。人は変わる。そして女たちがその道を横切るとき、予測はあらゆる価値を失う。

この話はしばらく前に語った。今日は、もっと強く語り直したい。ほとんど自分自身との対話として—記憶からの呼び声、時の扉を叩きつづける声として。その声は、かつてあったことだけでなく、もしかするとまだあり得ることをも思い出させてくれる。

第1幕 — 第二の人生の農家

その20年前、私は古い農家を買うつもりで、フランスの中心、ブルゴーニュへ発った。

ワインとチーズの土地、そしてフランス人が遺産のように守っているあの控えめな優雅さの土地だった。取引を扱う地元の不動産業者とは、すでに顔見知りだった。彼はその物件をめったにない機会だと紹介し、条件も私の好奇心をそそるには十分魅力的だった。

私は掘り出し物を漁る人間であったためしがない。掘り出し物は人間の発明だ。本物の機会は摂理のものである。

一帯は主要な商業ルートから遠く離れていた。人が訪れるのは主に8月と9月の収穫期か、新酒を祝う土地の祭りのときだ。それ以外の季節は、沈黙が丘と畑を支配していた。

農家の状態は申し分なかった。多少の手入れと、いくつかの構造上の手直しと、1階にまともな事務所が要るくらい。とくに骨の折れることは何もない。

ところが業者は、急いでいるようだった。

嵐が近づいている、と彼は説明し、馬に乗って手早く地所を見てまわろうと言った。

12ヘクタール。

地平線まで続くブドウ畑。

赤ワイン。

白ワイン。

シャンパン。

西には小さな湖。

アカシアの並木。

ブドウ販売の既存契約。

地所を馬で進みながら、持ち主はなぜ売るのかと尋ねた。

答えは単純で、打ちのめされるものだった。

「妻が癌なんです。残された年月を、この地所に縛られたまま過ごさせたくない。まだできるうちに、世界じゅうを連れてまわりたいんです」

私は何も言わなかった。

厩舎に戻ると、見事な若いアラブ馬が8頭いるのに気づいた。

物件全体の値段を尋ねた。

農家。

土地。

ブドウ畑。

厩舎。

馬。

男はためらった。

口にするのを怖がっているようにさえ見えた。

それから、言った。

「65万ユーロです」

数秒、考えた。

翌日、公証人に会った。

全額を支払った。

ローンなし。

銀行なし。

融資なし。

私はブルゴーニュの地所の持ち主になった。

ブドウ栽培者に。

農夫に。

田舎者にさえ。

そして、ひとりにやりとしながら思った。私の書くものは犬並みだと言い張っていた連中が、とうとう私にぴったりの職業を見つけてくれたわけだ、と。

フェルディナンド